阿呆どもの「反帝国主義」　Leila Al Shami

The 'anti-imperialism' of idiots

https://leilashami.wordpress.com/2018/04/14/the-anti-imperialism-of-idiots/

2018 年 4 月 14 日

またも欧米の「反戦」運動はシリア問題に取り組みだした。2011 年から数えて三度目の事である。一度目はオバマが、「レッドライン」だと見なしていた、2013 年「グータ化学攻撃」の後、シリア政権の軍事施設への空爆を計画した（が、実行しなかった）時だ。二回目はドナルド・トランプが、2017 年カン・シュイウウでの化学攻撃への対応として、アサド政権の無人の軍事施設への空爆を命じた時である。そして、爆撃を逃れて地下シェルターに居た多数の子どもを含む、少なくとも 34 名が死亡したドゥーマでの化学攻撃の後、米、英、仏が限定的軍事行動（アサド政権の軍事施設と化学兵器工場をターゲットとした空爆）を取ったのが今日である。

この三回にわたる欧米「反戦」左翼の主要な取り組みについて最初に記録にとどめておかねばならないのは、これらは戦争をやめさせる事とはほとんど何の関係も無かったという点である。2011 年以降、50 万以上のシリア人が殺されている。民間人の死亡の大多数は通常兵器の使用によるものであり、そのうち 94%はシリア、ロシア、イランの同盟によって為されたものである。平和的な民主主義派のデモに対するアサド政権の残虐な弾圧に続いたこの戦争に対しては、何の怒りも、関心を持っている振りすらも示されなかった。バレル爆弾、化学兵器、ナパーム弾が民主的に組織された自治コミュニティ、あるいは標的とされた病院や救急隊員たちに向けて投下された時も、何の怒りも示されなかった。市民は消耗品であり、虐殺者・ファシスト政権の軍事力はそうではない。実際のところ、「シリアから手を引け」というスローガンは、「アサドに手を出すな」という事を意味したのであり、それはしばしばロシアの軍事介入を助けたのだ。この事は昨日の「Stop the War UK」が組織したデモで、多くのアサド政権とロシアの旗が恥知らずにも翻っていた事からも明らかだ。

この左翼組織は根深い権威主義的傾向を示していて、政治分析の中心に国家そのものを置いているのである。それ故、その連帯も、ある社会における被抑圧・貧困グループにではなく、(解放闘争における主要な当事者として見なされた) 国家に対して示されるのである。たとえ、それがどんな専制国家であったとしても。シリア国内における社会的戦争には目を閉ざし、シリア人民（はその存在する場所において）は、単なる地政学的チェスにおけるポーン（歩兵）の駒として見られている。連中はお経のように「アサドは主権国家の正統な統治者だ」と唱えている。父親から独裁体制を受け継ぎ、もちろん勝利するに決まっているが、自由で公正な選挙も行ったことが無いアサドの事を。その「シリア陸軍（SAA)」は外国人傭兵の寄せ集め部隊と外国軍による爆撃の援護により失地を奪還しているだけであり、その大半はシリア生まれの抵抗者か市民と戦っているのである。反体制派に対して集団レイプ作戦を実行し始めたような「選挙で選ばれた」政府を、いったいどれだけの人が正統性が

あると見なすであろうか。そんな見解をたとえ可能性として考えるだけでも、それはシリア人の人間性を全面的に否認することでしかない。シリア人が、現代における最も残虐な独裁よりもマシなものに値しないと考えるのはもちろん、それを達成する能力もない、と見なすことはレイシズム（人種差別）である。

この権威主義的左翼にとって、支援は「反帝国主義」の口実の下にアサド政権に対して行われるのである。アサド政権は、米帝国及びシオニズムに反対する「抵抗の枢軸」の一部であると見なされている。アサド政権自体が第一次湾岸戦争に参戦し、あるいは米国の非合法的「容疑者引き渡し」プログラムに参加して、CIA に代わってシリアでテロリスト容疑者たちを拷問したことは、ほとんど問題にもされない。アサド政権がイスラエルよりも多くのパレスチナ人を虐殺しているのではないか、という疑いを向けられていることも、その軍隊を占領下のゴラン高原解放のためよりも国内反体制派の鎮圧のために使おうとしている事と同様に、常に見逃されているのである。

このような阿呆どもの「反帝国主義」は、帝国主義というものを、ただ米国の行動と同一視している。だが連中は、米国が 2014 年以降、シリアを爆撃し続けていることは知らないようだ。ラッカをイスラム国から解放する作戦において、あらゆる交戦の国際基準と均衡性原則への考慮は投げ捨てられた。1000 人以上の市民が殺害され、国連はラッカの 80%には今も人は住んでいない、と推定している。この介入に対して抗議行動を組織した主要な「反戦」団体は一つもなく、市民及び民生用インフラの安全を保障するよう要求する声も一つも起こらなかった。その代わり、かつてはネオコンの占有物であり、今ではアサド政権の公式の立場となっている「テロとの戦い」という言説が採用され、アサド政権に反対するすべての者はジハード（聖戦）主義のテロリストにされたのである。連中は、アサドの強制収容所で何千もの宗教とは関係のない平和的な民主派のデモ参加者が拷問で殺されており、その一方で戦闘的イスラム戦士は釈放されている、という事実は見て見ない振りをした。同様にイスラム国、ヌスラ戦線、シャーム自由人イスラム運動のようなイスラム過激派や権威主義的グループに反対して、解放された地域で抗議行動が続いてきた事も無視されてきたのである。シリア人は意見の多様性を保持するような洗練された知性は持っていないと見なされている。（多くの素晴らしい女性たちをはじめとした）市民社会の活動家、市民ジャーナリスト、人権運動家は無視されている。反対派とは最も権威主義的な部分だけにされてしまうか、あるいは単なる外国勢力の代理と見なされるだけである。

こうした「親ファシスト左翼」には、欧米に起源を持たないあらゆる形態の帝国主義は見えないのである。こうした左翼はアイデンティティ・ポリティックスをエゴイズムと結びつける。起こる事すべては、それが欧米から見た時に何を意味するのか、というプリズムを通して見られるだけだ。歴史をつくる権力は白人だけが持つのである。ペンタゴンによれば、現在、シリアには約 2000 人の米軍がいる。シリアの歴史上はじめて、北部のクルド支配地域に多くの米軍基地が設置された。これはシリアの自決を支持するすべての人にとって大事なことには違いないが、現在、国土の大部分を支配する何万ものイラン軍とそれに支援されたシーア派民兵や、ファシスト独裁を支援するロシア空軍の殺人的空爆と比較した時に

は、その重大性も色あせてしまう。ロシアはシリアに恒久的な軍事基地を設置し、その軍事支援と引き換えにシリアの石油、ガスの排他的権利を手に入れている。かつて、ノーム・チョムスキーは、ロシアはシリア政府の要請に応じて爆撃を行ったのであるから、その介入を帝国主義と見なすことはできないと主張した。そういう分析で良いなら、ヴェトナムにおける米国の介入も帝国主義ではなかった。なぜなら、南ヴェトナム政府によって要請されたものであったのだから。

多くの反戦団体がロシア、イランの介入に対する沈黙を「主要な敵は欧米本国にいる」と主張して正当化している。このように言い訳する事で、連中は、誰が実際に戦争を引き起こしているのかを判断するためのいかなる真剣な権力分析もやらずに済ませてきたのだ。シリア人にとって、主要な敵は文字通り本国にいる。それは国連が「皆殺しの犯罪」と呼んだものを実行しているアサドである。自分たち自身の矛盾には気が付きもせず、同じ反戦団体がガザ地区での平和的なデモに対するイスラエルの攻撃に対しては、はっきりと反対を唱えるのだ（それは正しいことであるが)。もちろん、帝国主義の主要なあらわれの一つは原住民の声を否認することである。すべてがこんな調子で、欧米の主要な反戦団体は、シリア人のスピーカーを招へいしないでシリアでカンファレンスを開催している。

アサド政権を支持して米、英、仏によるシリア攻撃に反対しているもう一つの政治潮流は極右である。今日において、ファシストと「反帝国主義左翼」の言っている事は、実質的に区別できなくなっている。米国において白人至上主義者 Richard Spencer、オルタナ右翼のポッドキャスター Mike Enoch、反移民活動家 Ann Counlter らは、皆、米軍による空爆に反対している。英国においては、英国民党（BNP）の前党首 Nick Griffin やイスラム排斥主義者 Katie Hopkins も反対に同調している。オルタナ右翼とオルタナ左翼は、様々な陰謀論を主張して政権の犯罪を免罪するという点で、同じようなものに収れんしつつある。連中は、化学兵器攻撃は「偽旗作戦」であってシリアがやったのではないとか、救急隊員はアルカイダで、故に正当な攻撃対象であった、と主張している。こうしたレポートを拡散しているのはシリア現地にはいない連中だから、その主張を自ら独立的に検証することはできないはずである。連中は「マスゴミ」や直接影響を受けているシリア人の言う事は信じず、ロシアやアサド政権のプロパガンダ放送に依拠していることが多い。時にはこれらの対立しているように見える二つの政治路線は収れんして、全くのコラボになってしまうこともある。ANSWER 連合（「戦争をとめて人種主義を終わらせる全国連合」）は米軍のアサド政権への空爆に反対して多くのデモを組織したが、過去にそのような歴史がある。両者ともイスラム嫌悪や反ユダヤ主義の語りを促進し、同じ話題やミームをシェアしている。

米国、ロシア、イランあるいはトルコのどれによるものであろうとも、シリアへの軍事介入に反対する多くの正当な理由がある。これらの国家もどれも、民主主義や人権というシリア人民の利益のためには行動していない。連中は、自らの権益のために行動しているだけである。今日の米、英、仏による軍事介入は、シリア人を大量虐殺から守ったり、化学兵器の使用は容認できないという国際基準を強制するためにではなくて、いつかそれが欧米に対して使用されないようにするためになされたものだ。さらなる外国からの空爆は平和も安

定ももたらさない。最悪の大量虐殺を止める最大の方策である、アサドの退陣を求める要求は殆ど見られないのだ。しかし、外国の介入に反対するなら、シリア人を虐殺から守るためのオルタナティブを提案せねばならない。道徳的には、「反帝国主義」というより高次の原則を守るためにシリア人は黙って死ねというのは、少なくとも不愉快な言い草である。外国による介入に代わる多くのオルタナティブは、何度も何度もシリア人から提起されたが、無視されてきた。だから問題はそのままである。外交的解決が失敗し、大量虐殺政権が強大国からの国際的支援によって非難を免れ、日々の爆撃を中止させ、兵糧攻めの包囲戦をやめさせ、あるいは、もはや産業といえる規模で大量に拷問を受けている囚人たちを釈放させるための手立ては何も講じられない時に、何ができるのであろうか。

私にはもはや答えがない。私はずっとあらゆる外国勢力によるシリアへの介入に反対してきたし、シリアにおける独裁を排除するためのシリア人主導のプロセスと、市民と人権を護り、戦争犯罪のすべての当事者に説明責任を果たさせるための努力に基づく国際的プロセスを支持してきた。交渉による解決が唯一の戦争を終わらせる手段であるが、相変わらずそれは手の届かないところにあるように思える。アサド（とその支援者たち）は、あらゆるプロセスを阻止すると決意しており、完全な軍事的勝利とあらゆる残った民主的対案の圧殺を追求しているのだ。何百というシリア人が、毎週、想像もできない最も野蛮な方法で殺されている。過激派グループとそのイデオロギーとが、国家により鍛造されたカオスの中で繁茂している。法律 10 号のような法的プロセスが適用され、二度と祖国には戻れないなかで、市民は千人単位で国外へ逃げ出している。国際的なシステム自体が、その無能さの重みに耐えかねて崩壊しつつある。「もう二度と」という言葉がうつろに響く。犠牲者たちに連帯する大きな人民の運動はどこにもない。代わりに犠牲者たちは中傷され、その苦しみは嘲笑、否定され、議論の中でその声が聴かれる事はないか、あるいは、はるか遠方にいる人々―シリアについても、革命についても、あるいは戦争についても何も知らないくせに、傲岸不遜にも何がベストか自分たちは分かっていると信じている人々―からの疑問にさらされるか、のどちらかだ。こうした絶望的な状況が多くのシリア人たちを米、英、仏の軍事行動への歓迎に向かわせ、皆、それにともなうリスクは承知の上で、外国の介入が唯一の希望だと今では考えているのだ。

これだけは確実に言える。私はもう、シリア人に日々の虐殺からのつかの間の休息をもたらすだけの軍事基地・化学施設への空爆で眠れぬ夜を過ごしたくはない。そして、生きられた現実よりも上位にグランドナラティブ（大きな物語）を置くような人々、はるか彼方から残虐な体制を支持するような人々、レイシズム、陰謀論、虐殺の否認を宣伝するような人々の事を決して共にたたかう仲間とみなすことはないであろう。

（翻訳：新山　力）